(財)八尾市文化財調査研究会報告 8

小阪合遺跡発掘調査概要

――流域下水道等整備に伴う発掘調査――

1986年

(財)八尾市文化財調査研究会

（財）八尾市文化財調査研究会８

正　誤　表

頁	行	誤	正
例　言	１０	昭和60年 3月15日まで	昭和61年 3月15日まで
２	３，４	狭　議	狭　義
９	第８図	ＳＥ－２平断面	ＳＥ－２平断面図
１６	見出し	出土遺物観察表	出土遺物観察表
２３	１	近世に至る遺構	近世に至る遺構・遺物
２３	註４	近畿自動車天理	近畿自動車道天理

(財)八尾市文化財調査研究会報告 8

小阪合(こざかい)遺跡発掘調査概要

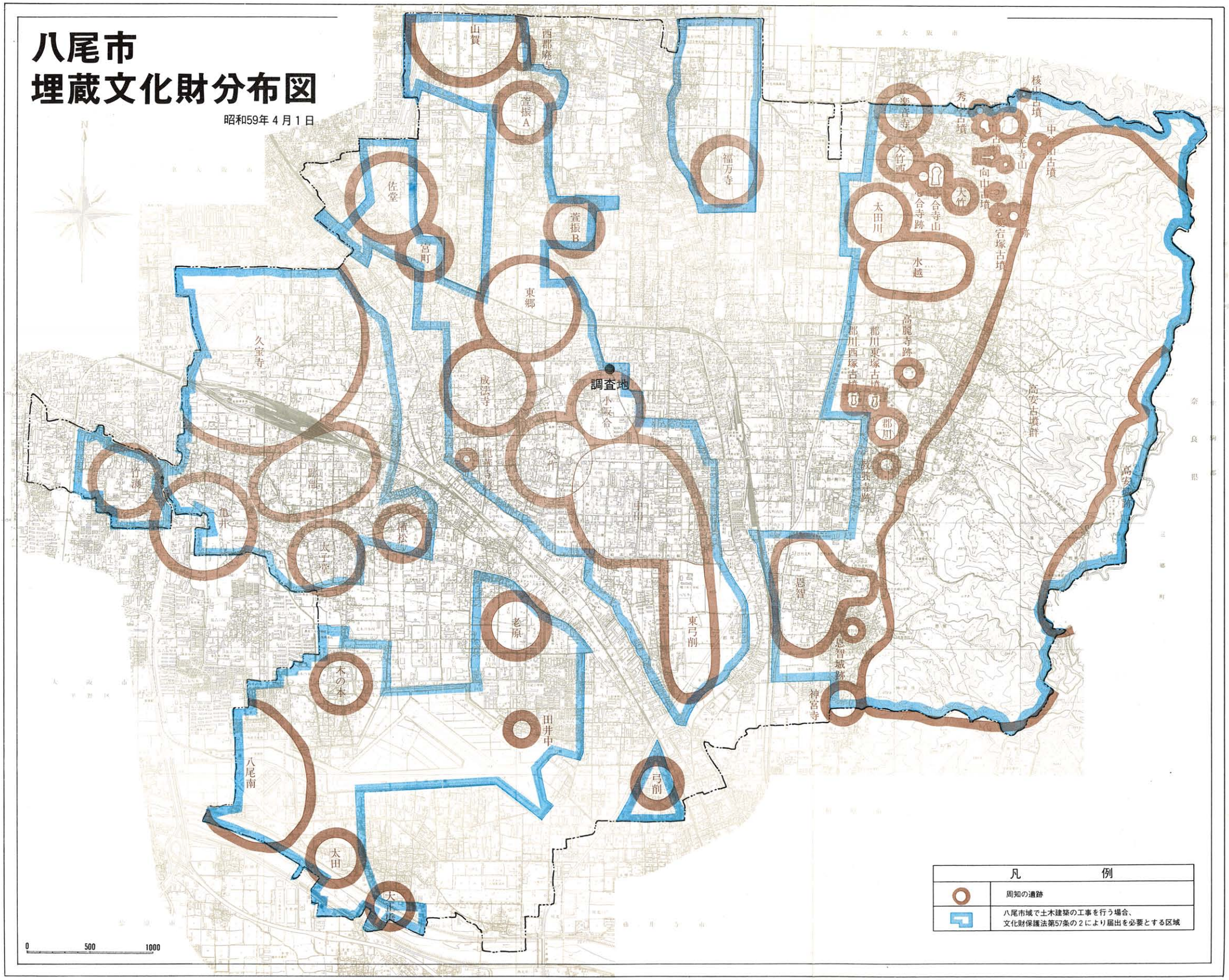
―― 流域下水道等整備に伴う発掘調査 ――

1986年

(財)八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

昭和59年４月１日



凡	例
	周知の遺跡
	八尾市域で土木建築の工事を行う場合、文化財保護法第57条の２により届出を必要とする区域

序　　文

八尾市の治水対策として永年の課題とされている楠根川改修も、近鉄線より下流は現在大阪府において施工中であり、また、近鉄線から上流の小阪合ポンプ場までは、計画延長460mを河川改修・区画整理事業・流域下水道事業など、一体的に整備を進めることになりました。河川改修のうち106mについては、大阪府の受託事業である寝屋川南部流域下水道計画で、即に進行中の南小阪合土地区画整理事業と並行し実施することとなりました。

これに先立ち、埋蔵文化財発掘調査を実施し、その実態把握と記録保存に努めて来たところであります。その結果、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての溝・井戸等の遺構を検出し、瓦器椀等の遺物の出土を見たのであります。

ここにその概要を収録し、市民の皆様をはじめとしてご協力いただいた関係各位にわずかでも寄与出来れば幸せに存じます。

なお、本書作成にあたって、御協力・御指示をいただいた関係各位に感謝の意を表します。

昭和61年3月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　山脇悦司

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南小阪合町１丁目において実施した流域下水道等整備に伴う発掘調査の概要報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡の発掘調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市の委託を受けて実施したものである。

1．今回の発掘調査は、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第５次調査にあたる。

1．現地調査は、昭和60年１月25日から３月20日にかけて、西村公助を担当者として実施した。なお、調査補助員として、武田正泰・中川暁・中野慶太・萩原剛良・前田芳嗣・益本浩・松岡利行・森山憲一が参加した。

1．内業整理および本書作成業務は、昭和60年８月１日から昭和60年３月15日まで実施した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－西村・萩原・前田・森山・原田昌則・成海佳子、図面レイアウト－原田、トレース－成海、遺物写真撮影－西村・原田が分担した。また、本文は西村の報告をもとに、原田・成海が検討を加え、補筆・訂正した。全体の編集・構成は、原田・成海が行った。

凡　　例

1．実測図の縮尺率は、遺構は１：20・１：80・１：400を基調とし、遺物は１：４に統一した。

1．遺物については、通し番号を与え、実測図・写真図版ともに共通している。

1．遺構実測図の方位は、すべて磁北を示している。

本　文　目　次

八尾市埋蔵文化財分布図
序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経過……1
第２章　地理・歴史的環境……2
第３章　調査概要……5
　第１節　調査方法……5
　第２節　基本的層序……5
　第３節　調査結果……6
　　１）検出遺構……6
　　第１調査面……6
　　第２調査面……8
　　第３調査面……10
　　２）出土遺物……14
第４章　出土遺物観察表……16
第５章　まとめ……23

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……3
第２図　基本的層序……5
第３図　ＳＤ－１平断面図……6
第４図　検出遺構平面図および地区割図……（折込）６－７
第５図　ＳＤ－２・ＳＤ－３平断面図……7
第６図　ＳＤ－６平断面図……8

第７図　ＳＥ－１平断面図……8
第８図　ＳＥ－２平断面図……9
第９図　ＳＥ－１・ＳＥ－２出土遺物実測図……10
第10図　ＳＤ－７平断面図……11
第11図　ＳＤ－７出土遺物実測図……11
第12図　ＳＤ－８出土遺物実測図１……11
第13図　ＳＤ－８出土遺物実測図２……12
第14図　ＳＤ－８出土遺物実測図３……13
第15図　ＳＤ－９平断面図……14
第16図　ＳＤ－10平断面図……14
第17図　包含層出土遺物実測図……15

図　版　目　次

図版一　下流調査区第３調査面全景（北から）
図版二　上流調査区第１調査面全景（西から）
図版三　ＳＤ－２・ＳＤ－３（南から）
　　ＳＤ－６（南から）
図版四　ＳＤ－７・ＳＤ－８・ＳＥ－１（南から）
　　ＳＤ－９（南から）
図版五　ＳＤ－10（南から）
　　ＳＥ－１（南から）
図版六　ＳＥ－２遺物出土状況（北から）
　　ＳＥ－２完掘（北から）
図版七　ＳＥ－２出土遺物
図版八　ＳＤ－８・包含層出土遺物
図版九　ＳＤ－８・包含層出土遺物

第１章　調査に至る経過

小阪合遺跡は、行政区画上八尾市南小阪合町・青山町・若草町に所在する。当遺跡発見の契機は、昭和30年に若草町で実施された大阪府住宅供給公社山本団地建設の際、土器の出土を見たことによる。その後目立った開発もなかったが、昭和57年度から八尾市の事業である南小阪合土地区画整理事業[註1]が計画され、それに伴って(財)八尾市文化財調査研究会が当地一帯で継続的に発掘調査(第１次～第４次)を実施している他、大阪府教育委員会文化財保護課が昭和58・59年度に南小阪合町１丁目および４丁目[註2]で、八尾市教育委員会文化財室は昭和59年度に青山町４丁目[註3]で発掘調査を実施している。これらの発掘調査によって、当遺跡が弥生時代後期から近世の複合遺跡[註4]で、南部が中田遺跡[註5]と接する広範囲な遺跡であることが明確となった。

このような情勢下、当遺跡推定範囲内の北部に当る南小阪合町１丁目において、流域下水道小阪合ポンプ場放流渠および汚水渠の工事計画が、八尾市下水道部河川課から当市教育委員会文化財室に通知された。当市教育委員会文化財室では、過去の調査結果から当工事計画地内にも何らかの埋蔵文化財が存在する可能性があると判断し、試掘調査が必要な旨を事業者である当市下水道部河川課へ通告した。昭和59年８月13日、当市教育委員会文化財室が試掘調査を実施した結果、現地表下1.0～1.2mで、平安時代に比定される井戸遺構１基を検出した。この試掘結果に基づいて、当市教育委員会文化財室は当市下水道部河川課と協議し、上記工事で掘削を予定されている幅６ｍ・長さ106mについて、事前に発掘調査を実施する必要があると判断した。発掘調査は、当市下水道部河川課の委託を受けて、当調査研究会が主体となり、昭和60年１月25日から実施することとなった。

註

註１　八尾市役所市史編纂室『八尾市史』　1958

註２　ａ　(財)八尾市文化財調査研究会　「小阪合遺跡」『昭和58年度事業概要報告』：(財)八尾市文化財調査研究会報告５　1984

ｂ　(財)八尾市文化財調査研究会　「小阪合遺跡（第４次調査)」『昭和59年度事業概要報告』：(財)八尾市文化財調査研究会報告７　1985

註３　ａ　昭和58年度に南小阪合町１丁目で、小阪合ポンプ場建設に伴う発掘調査を実施している。

ｂ　昭和59年度に南小阪合町４丁目で、都市計画事業寝屋川南部流域下水道事業に伴う発掘調査を実施している。

註４　八尾市教育委員会　「小阪合遺跡の調査〈青山町４丁目４〉」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』：八尾市文化財調査報告11　1985

註５　八尾市教育委員会　『中田遺跡』：中田遺跡調査報告Ｉ　1974

第２章　地理・歴史的環境

八尾市は大阪府東部に位置し、東は生駒山地の山稜線で奈良県生駒郡平群町・三郷町と境し、西は大阪市平野区、南は柏原市・藤井寺市・松原市、北は東大阪市と隣接している。八尾市の地形は、南北に走る生駒山地とそこから西に広がる扇状地からなる東部地域と、狭議の「河内平野」（以下の河内平野は狭議を指す）と呼ばれる沖積低地の西部地域に区別できる。河内平野の内部には、恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川等の大小河川が北流し、これらの河川の堆積作用によって、氾濫原・潟湖性低地および自然堤防が形成されている。

当調査地である小阪合遺跡は、上記の水系で区別すれば、楠根川の自然堤防上の微高地上に立地する遺跡と言える。以下、河内平野の変遷を踏まえたうえで、小阪合遺跡とその周辺の遺跡を時代別に概観する。

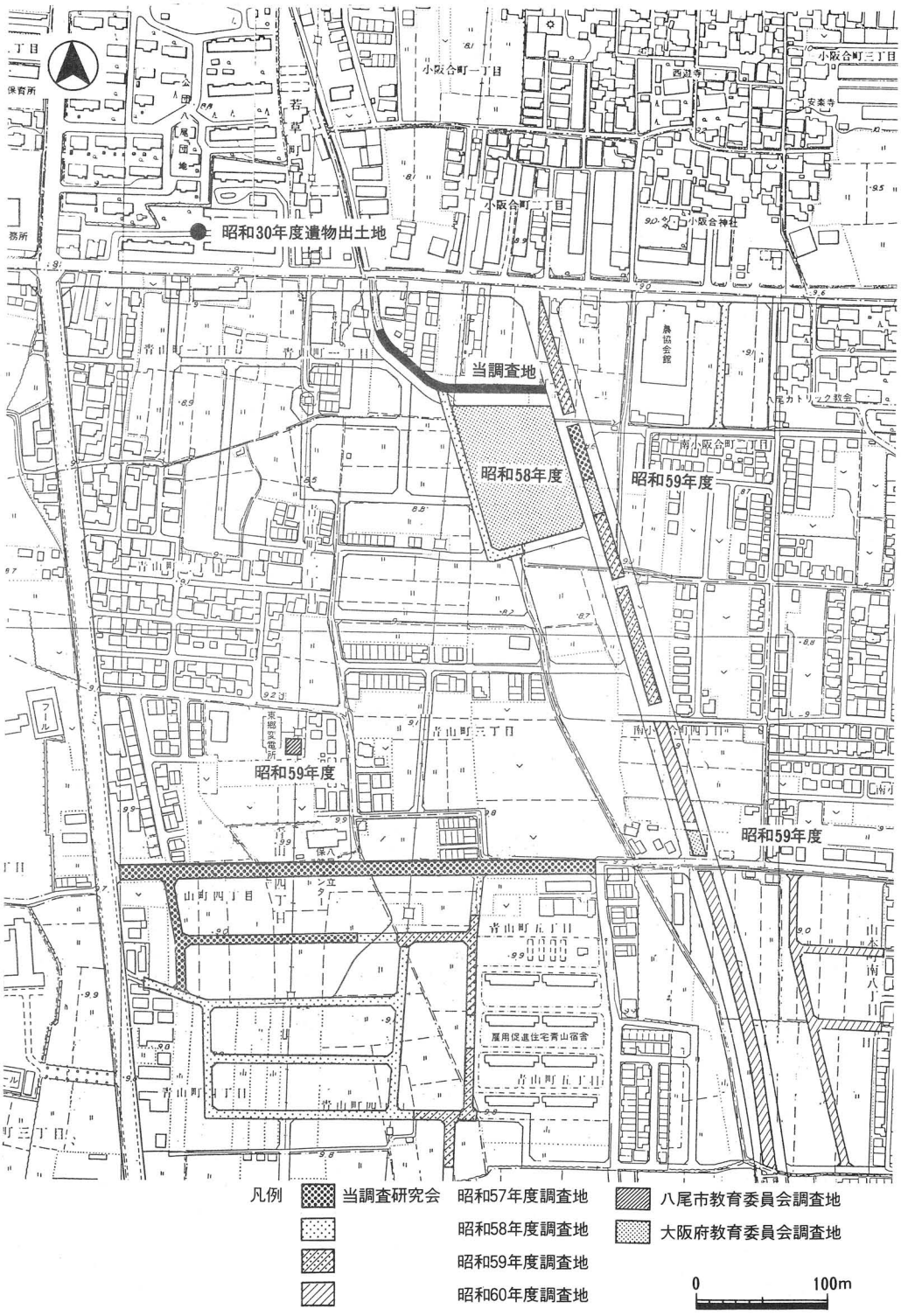
旧石器時代の生活の場は、生駒山地西麓および羽曳野丘陵上にあったようで、河内平野の内部ではこの時期の遺跡は明確でない。ただ、二次堆積ではあるが、八尾南遺跡[註1]・長原遺跡[註2]・瓜破遺跡[註3]で、この時期に比定される石器が出土している。

縄文時代になると海進現象によって海水が進入し、前期から後期にかけては湾が形成されていたようである。続く晩期には、セタシジミの存在に代表されるように、河内平野は湾から潟・湖へ変遷したようである。[註4] 河内平野内部では、中期初頭・中期末葉に比定される土器が巨摩廃寺遺跡[註5]・山賀遺跡[註6]から出土したほか、後期に比定される土器が美園遺跡[註7]・若江北遺跡[註8]・久宝寺遺跡[註9]・亀井遺跡[註10]・城山遺跡[註11]・長原遺跡[註12]・八尾南遺跡[註13]から出土しているが、いずれも明確な遺構に伴うものではない。晩期には、長原遺跡[註14]で居住地と墓域が検出されており、この時期の集落のあり方を示している。[註15]

弥生時代になると、河内平野を北流している大小河川の沖積作用によって形成された自然堤防および後背湿地に集落が営まれるようになる。この時代の遺跡には、前述した遺跡に加え、萱振Ａ遺跡[註16]・萱振Ｂ遺跡[註16]・東郷遺跡[註17]・中田遺跡[註18]・成法寺遺跡[註19]が存在する。

古墳時代になると、自然環境は安定し、自然堤防上および微高地等に多くの集落が出現している。中でも、美園遺跡[註20]・山賀遺跡[註21]・萱振Ａ遺跡[註22]では古墳の存在が確認されており、平野部における古墳の存在が明らかとなった。

奈良時代以降は、大化の改新によって国・郡・郷がおかれ、平野部における大規模な開発が行われるようになる。当遺跡周辺では、萱振Ａ遺跡[註23]・東郷遺跡[註24]・成法寺遺跡[註25]・中田遺跡[註26]で奈良時代から鎌倉時代に至る遺構・遺物が確認されている。室町時代以降になると、当遺跡範囲内では遺構・遺物は確認されておらず、全域は近年まで耕地として利用されていたようである。


昭和30年度遺物出土地
当調査地
昭和58年度
昭和59年度
昭和59年度
昭和59年度
小阪合町一丁目
小阪合町三丁目
西遊寺
安楽寺
小阪合神社
若草町
公団八尾団地
青山町一丁目
青山町三丁目
青山町四丁目
青山町五丁目
南小阪合町四丁目
八尾カトリック教会
雇用促進住宅青山宿舎
凡例
当調査研究会
昭和57年度調査地
昭和58年度調査地
昭和59年度調査地
昭和60年度調査地
八尾市教育委員会調査地
大阪府教育委員会調査地
0
100m

第1図　調査地周辺図

註

註１　八尾南遺跡調査会　『八尾南遺跡』　大阪市高速電気軌道２号線建設事業に伴う発掘調査報告書　1981

註２　(財)大阪市文化財協会　『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』　大阪市高速電気軌道第２号線延伸工事に伴う発掘調査報告書　1982

註３　(財)大阪市文化財協会　『瓜破遺跡』　大阪市土木局施工の大阪市平野区瓜破６丁目側道舗装新設工事に伴う遺跡発掘調査報告書　1983

註４　横山卓雄　「氷河時代の大阪」『大阪府誌』：第１巻古代編Ⅰ　大阪府編　1978

註５　前掲書註４

註６　(財)大阪文化財センター　『巨摩・瓜生堂』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1981

註７　(財)大阪文化財センター　『考古展　河内平野を掘る』　近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として　1981

註８　(財)大阪文化財センター　『美園』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　1981

註９　(財)大阪文化財センター　『若江北』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　1983

註10　東大阪新聞社　『河内史談』：第４輯　1954

註11　(財)大阪文化財センター　『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書　1980

註12　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター　『城山遺跡現地説明会資料』　1984

註13　長原遺跡調査会　『長原遺跡発掘調査報告』　1978

註14　前掲書註１

註15　(財)大阪市文化財協会　『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』（仮称）大阪市立第８養護学校建設に伴う遺跡発掘調査報告書　1983

註16　大阪府教育委員会　『萱振遺跡現地説明会資料Ⅰ』　1984

註17　(財)八尾市文化財調査研究会　「東郷遺跡（第15次調査）」　『昭和58年度事業概要報告』：(財)八尾市文化財調査研究会報告５　1984

註18　八尾市教育委員会　『中田遺跡』：中田遺跡調査報告Ⅰ　1973

註19　八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会　『成法寺遺跡』　八尾市光南町１丁目29番地の調査　1983

註20　前掲書註８

註21　(財)大阪文化財センター　『山賀（その２）』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983

註22　前掲書註16

註23　前掲書註16

註24　八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会　「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』：(財)八尾市文化財調査研究会報告２　1983

註25　前掲書註19

註26　前掲書註18

第３章　調査概要

第１節　調査方法

調査は、放流渠および汚水渠工事予定地内の全域にわたって実施した。掘削については、八尾市教育委員会文化財室が実施した試掘調査の結果に基づき、盛土・旧耕土を機械掘削し、以下の各層については土層葉理に従って人力掘削を実施し、３面について調査を行った。調査区の地区割は、調査区北端を基準に５ｍ間隔の調査杭を打ち、北端からＡ区・Ｂ区・・・Ｔ区とした。土層の堆積状況および遺構の先後関係を調べるため、調査区内の南側に観察用セクションを残した。高さの基準はＴＰ値を採用し、土層断面図・遺構平断面図の縮尺は$\frac{1}{200}$・$\frac{1}{100}$・$\frac{1}{10}$を併用した。また、写真撮影は写真撮影用足場を設置して調査区全域の撮影を行うとともに、必要に応じて遺構の部分撮影を行った。

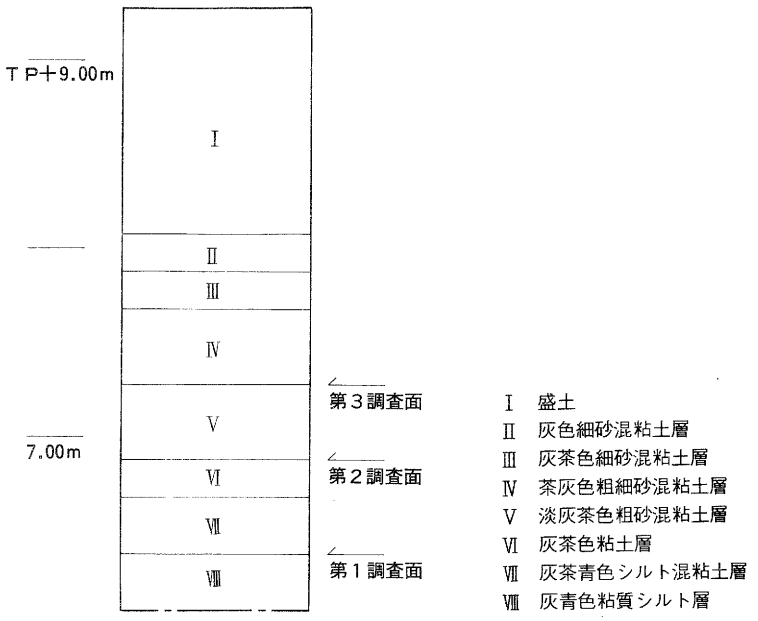
なお、調査については、調査区が途中で弓状に屈曲しているため、屈曲部を境として上流側と下流側に分けて行った。

第２節　基本的層序

第Ⅰ層：盛土、層厚60～100cm、地表面の標高はＴＰ＋8.4～8.5ｍを測る。

第Ⅱ層：灰色細砂混粘土、層厚10～15cm、旧耕土である。

第Ⅲ層：灰茶色細砂混粘土、層厚10～15cm、近世の遺物を包含している。



第２図　基本的層序

第Ⅳ層：茶灰色細砂混粘土。層厚15～20cm。鎌倉時代に比定される瓦器椀の破片を少量含む。

第Ⅴ層：淡灰茶色粗細砂混粘土。層厚15～20cm。上面は鎌倉時代前期以降の遺構面である。

第Ⅵ層：灰茶色粘土。層厚５～10cm。上面は平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構面である。

第Ⅶ層：灰茶青色シルト混粘土。層厚10～15cm。弥生時代中期から古墳時代後期の遺物を包含している。

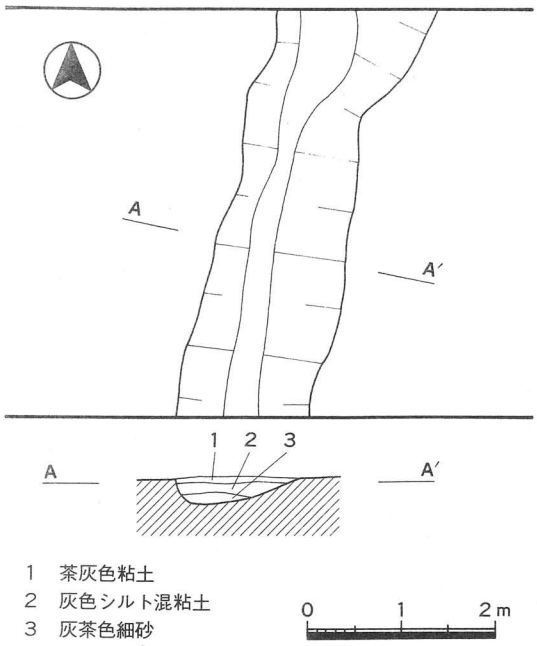
第Ⅷ層：灰青色粘質シルト。層厚10～15cm。上面は弥生時代後期から古墳時代後期の遺構面である。

なお、第Ⅷ層以下は、灰茶色細砂が２ｍ以上堆積していることを確認したが、遺構および遺物は検出できなかった。

第３節　調査結果

調査の結果、第Ⅷ層上面で弥生時代後期から古墳時代の溝遺構６条（ＳＤ－１～ＳＤ－６）、第Ⅵ層上面で平安時代後期から鎌倉時代前期の井戸遺構２基（ＳＥ－１・ＳＥ－２）・小穴遺構１個（ＳＰ－１）・溝遺構１条（ＳＤ－７）、第Ⅴ層上面で鎌倉時代前期以降の溝遺構３条（ＳＤ－８～ＳＤ－10）を検出した。

各調査面は、第Ⅷ層上面を第１調査面・第Ⅵ層上面を第２調査面・第Ⅴ層上面を第３調査面と付称した。以下、各調査面ごとに、検出遺構および出土遺物の概要を記述する。



第３図　ＳＤ－１平断面図

１）検出遺構

第１調査面

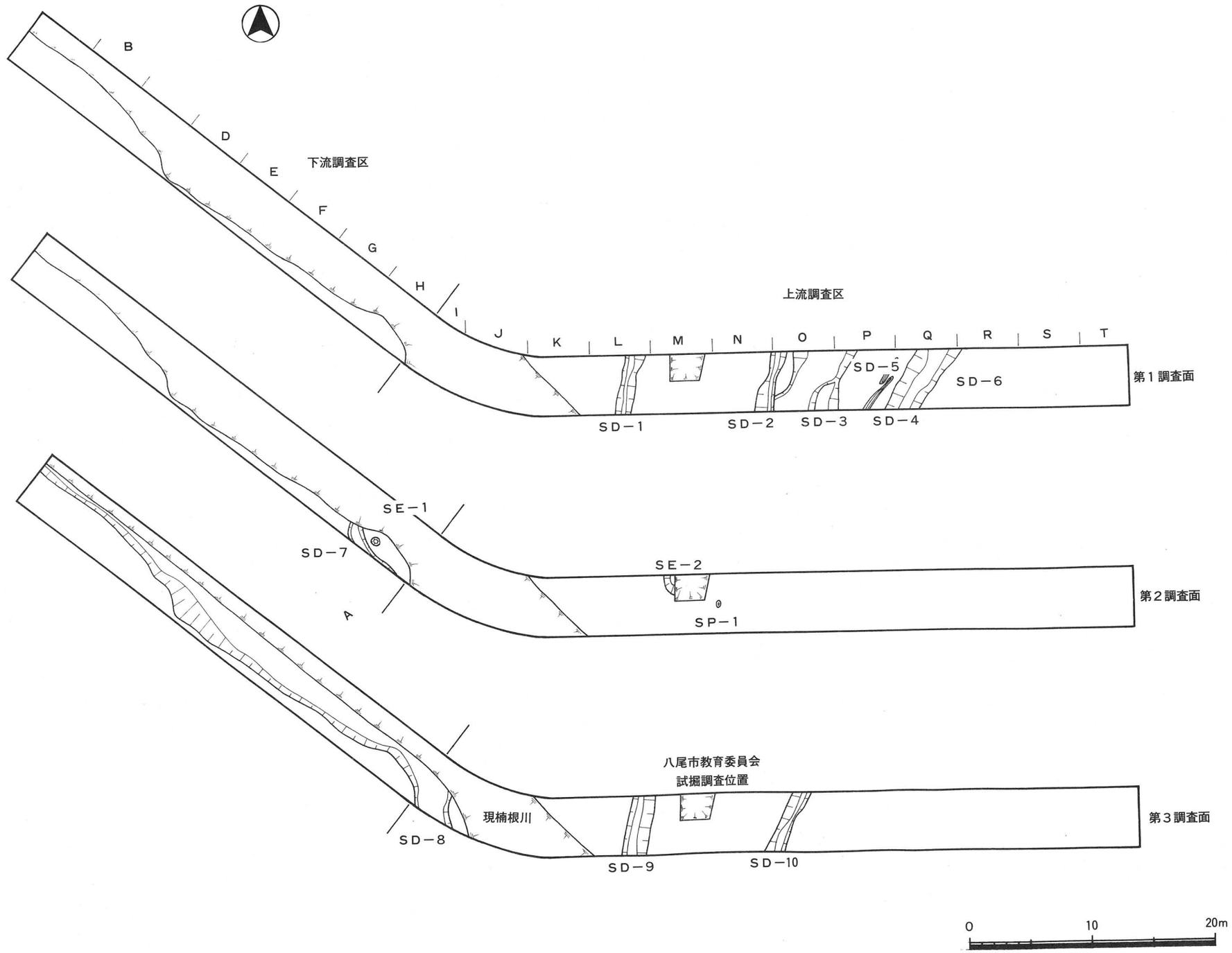
溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

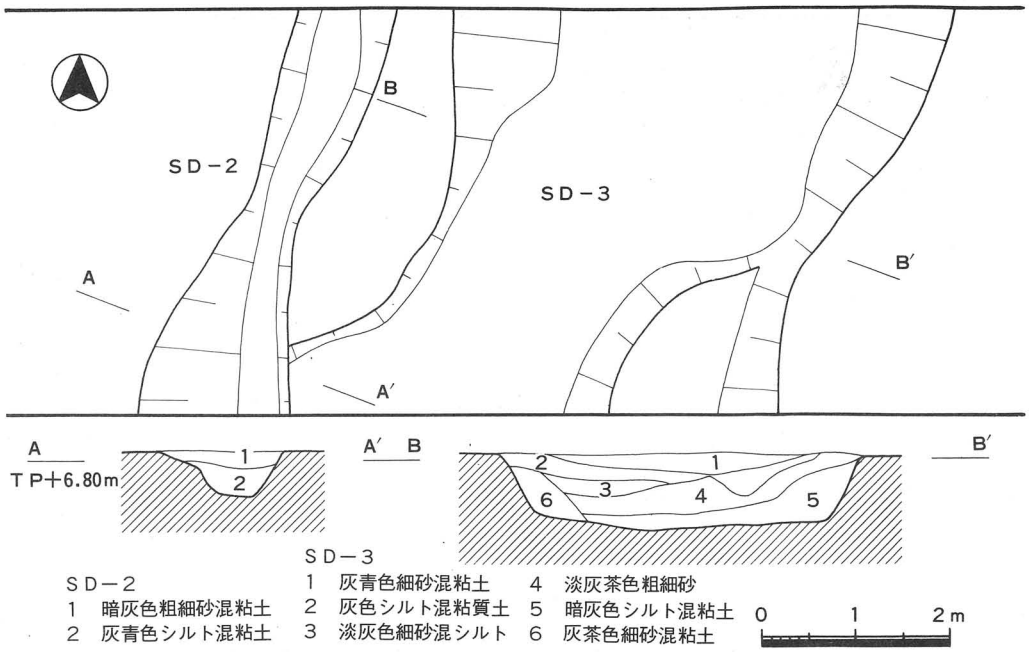
Ｌ区で検出した。南北に伸びる溝で、幅約1.4m・深さ約0.25mを測る。内部堆積土は、上方より第１層茶灰色粘土・第２層灰色シルト混粘土・第３層灰茶色細砂である。遺物の出土はなかった。

ＳＤ－２

Ｎ区で検出した。南北に伸びる溝で、南部でＳＤ－３を切っている。幅約1.5m・深さ約0.5mを測る。内部堆積土は、上方より第１層暗灰色粗細砂混粘土・第２層灰青色シルト混粘土である。遺物の出土はなかった。



第４図　検出遺構平面図および地区割図



第5図　SD－2・SD－3平断面図

SD－3

O区で検出した。南北に伸びる溝で、幅約4.0m・深さ約1.3mを測る。内部堆積土は、上方より第1層灰青色細砂混粘土・第2層灰色シルト混粘質土・第3層淡灰色細砂混シルト・第4層淡灰茶色粗細砂・第5層暗灰色シルト混粘土・第6層灰茶色細砂混粘土である。このうち、第5層暗灰色シルト混粘土から、自然木が少量出土している。

SD－4

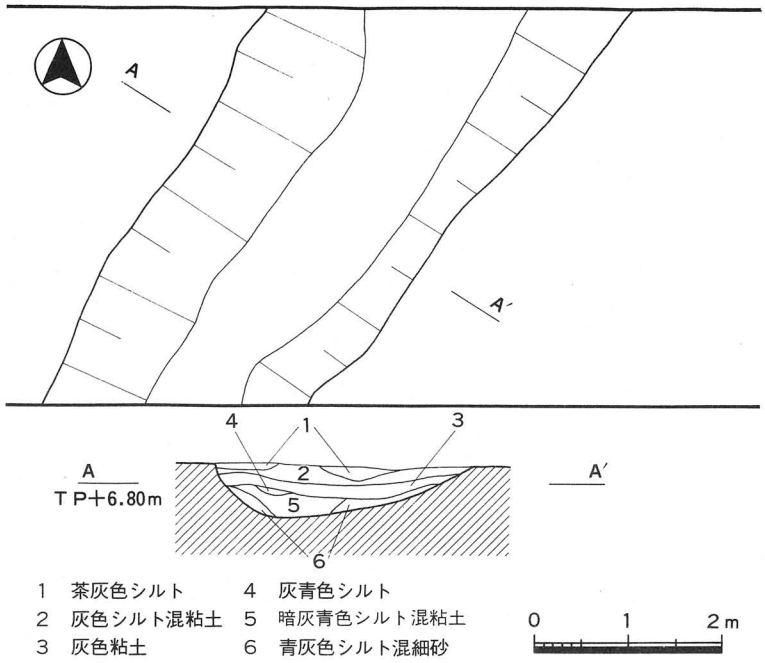
P区で検出した。南西－北東に伸びる溝で、幅約0.3m・深さ約0.1mを測る。内部堆積土は、上方より第1層暗灰色粘土・第2層灰青色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD－5

P区で検出した。南西－北東に伸びる溝で、幅約0.25m・深さ約0.1mを測る。内部堆積土は、上方より第1層暗灰色粘土・第2層灰青色粘土である。形状・数値・内部堆積土は**SD－4**と近似しており、同様の性格をおびた遺構と考えられる。

SD－6

Q区で検出した。南西－北東に伸びる溝で、幅約2.7m・深さ約0.6mを測る。内部堆積土は、上方より第1層茶灰色シルト・第2層灰色シルト混粘土・第3層灰色粘土・第4層灰青色シルト・第5層暗灰青色シルト混粘土・第6層青灰色シルト混細砂である。遺物の出土は認められない。



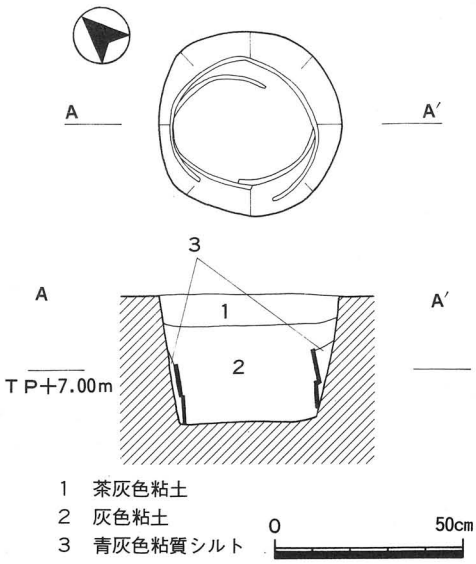
第６図　ＳＤ－６平断面図

第２調査面

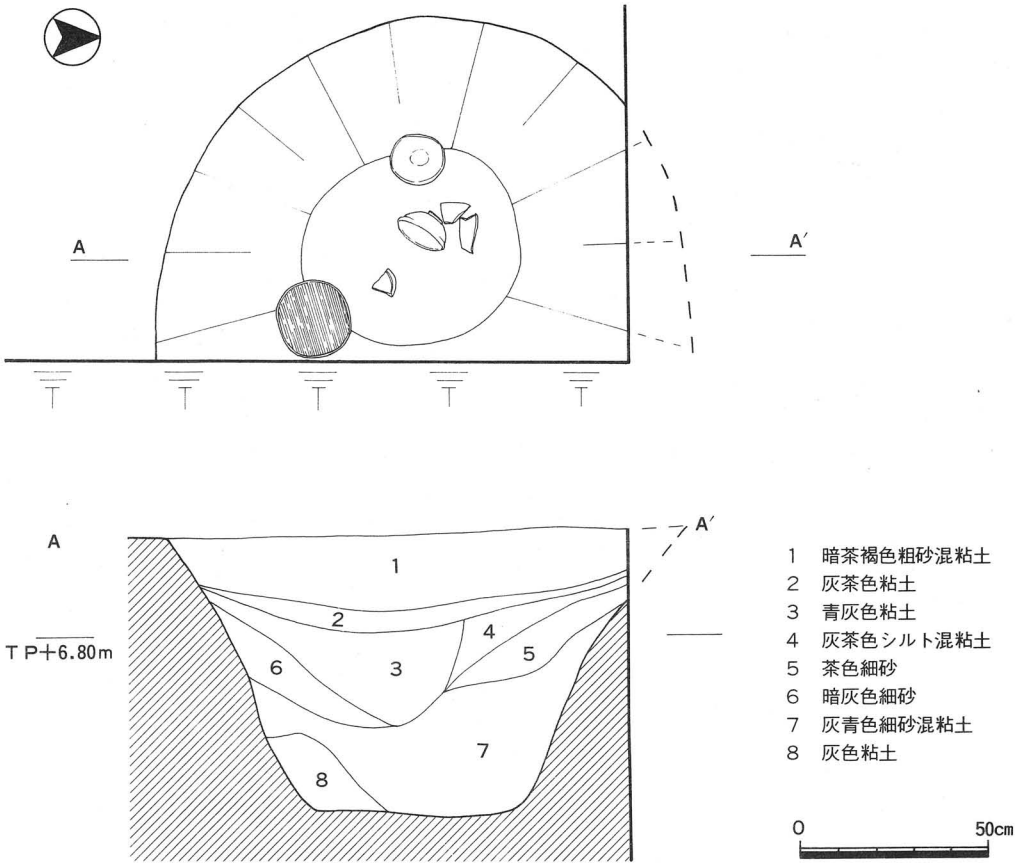
井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

Ｇ区で検出した曲物井戸で、上面径約0.5m・深さ約0.35mを測る。上面円形・断面逆台形を呈する掘形の底部に、径0.35mを測る曲物を積んで井戸側としている。曲物は２段遺存していたが、上段の曲物は腐蝕が著しく現状をとどめていなかった。下段の曲物は良好に遺存しており、高さ９cm・厚さ0.5cmを測る。井戸内の堆積土は、上方より第１層茶灰色粘土・第２層灰色粘土である。また、曲物と掘形の間には第３層青灰色粘質シルトが堆積している。第２層灰色粘土から瓦器椀（**１・２**）・土師器の細片が少量出土している。出土した瓦器椀から推定すれば、鎌倉時代前期の井戸と考えられる。



第７図　ＳＥ－１平断面図



第８図　ＳＥ－２平断面

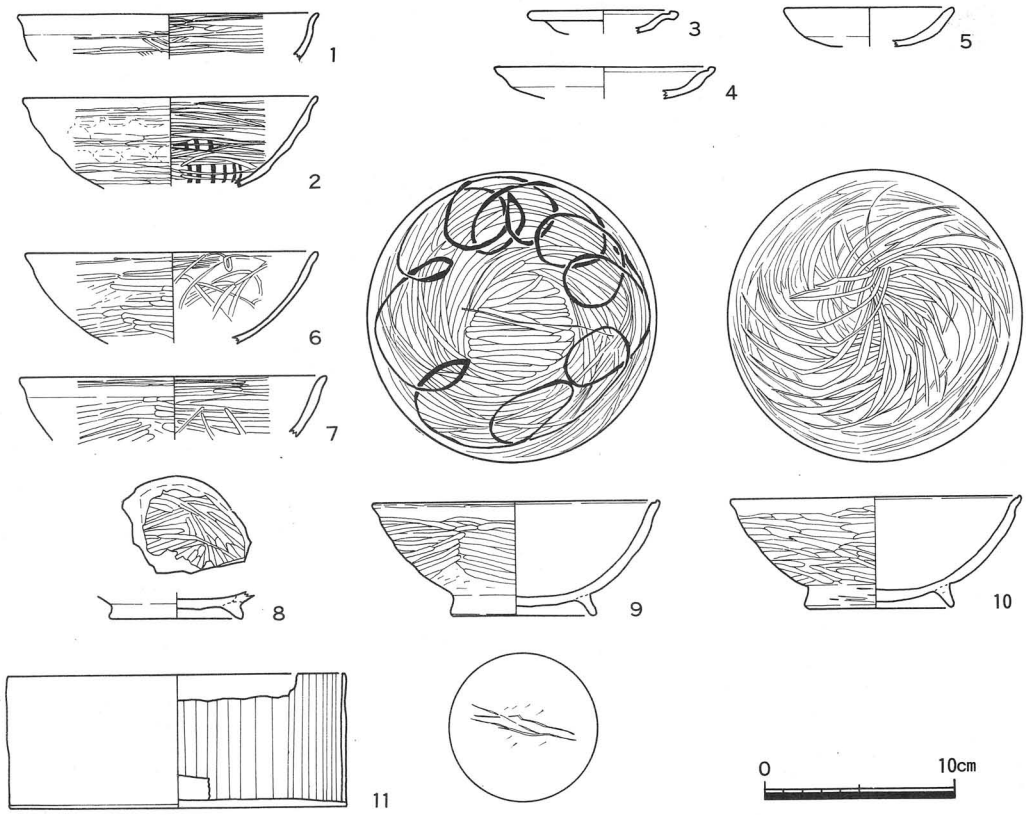
ＳＥ－２

Ｍ区で検出した素掘り井戸であるが、北部・東部が調査区外へ至る。検出部から復元すれば、上面は径約1.2mの円形を呈するものと考えられ、断面は逆台形で深さ0.75mを測る。内部堆積土は、上方より第１層暗茶褐色粗砂混粘土・第２層灰茶色粘土・第３層青灰色粘土・第４層灰茶色シルト混粘土・第５層茶色細砂・第６層暗灰色細砂・第７層灰青色細砂混粘土・第８層灰色粘土である。遺物は、第２層灰茶色粘土から桶形木製品（**11**）が、第７層灰青色細砂混粘土から土師器小皿・瓦器椀（**3**～**10**）が出土している。このうち、（**9**・**10**）は和泉型瓦器椀の最古に位置づけられる資料であることから、井戸の時期は平安時代後期と考えられる。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１

Ｍ～Ｎ区で検出した。径約0.25m・深さ約0.1mを測る。内部は茶灰褐色粗砂混粘土のみで充填されており、遺物は出土していない。



第9図　ＳＥ－１（１・２）・ＳＥ－２（３～11）出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ－７

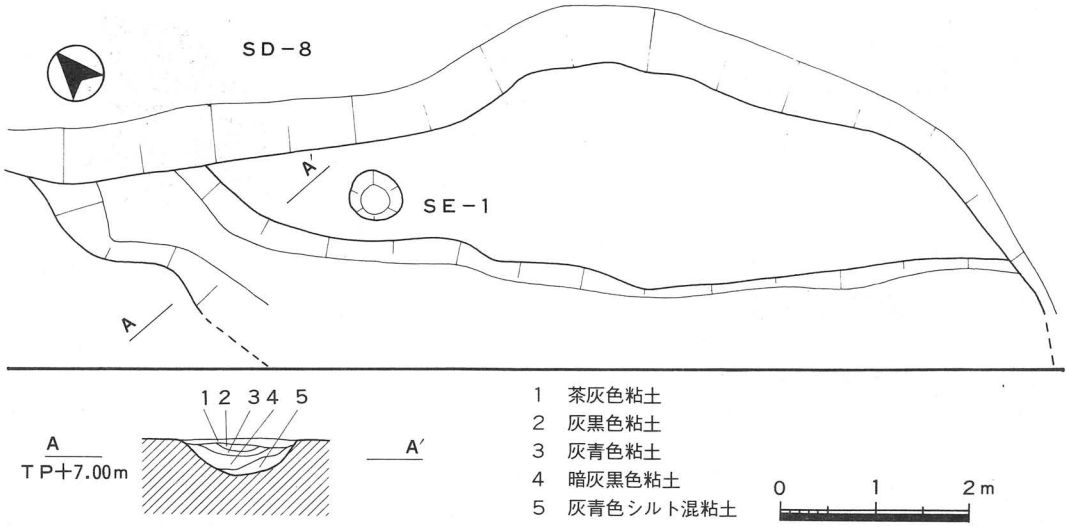
Ｇ～Ｈ区で検出した。南西－北東に伸びる溝であるが、北部は**ＳＤ－８**によって切られている。幅約1.1m・深さ約0.45mを測る。内部堆積土は、上方より第１層茶灰色粘土・第２層灰黒色粘土・第３層灰青色粘土・第４層暗灰黒色粘土・第５層灰青色シルト混粘土である。第４層から須恵器杯身・埴輪・土師器小皿・黒色土器椀（**12～15**）等が出土している。

第３調査面

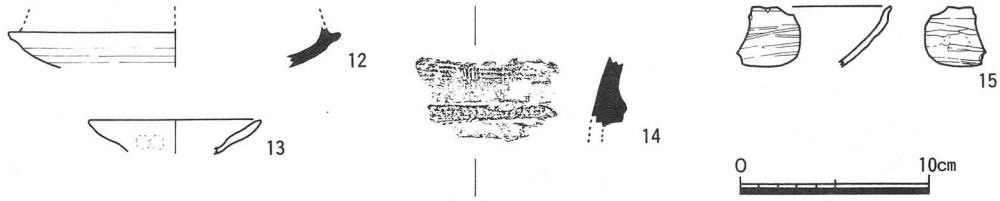
溝（ＳＤ）

ＳＤ－８

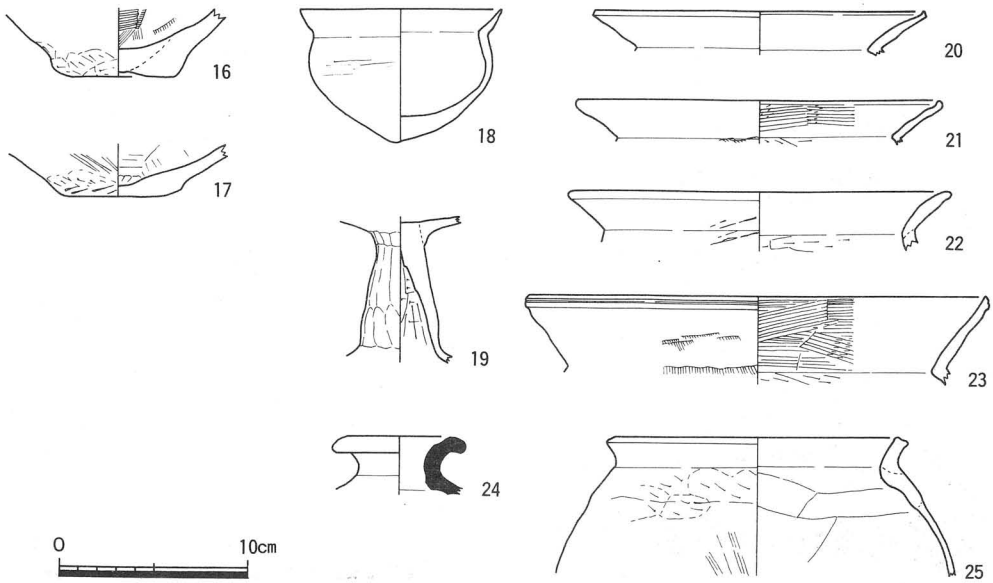
Ａ～Ｉ区で検出した溝で、幅３ｍ・深さ0.4m・検出長43mを測る。屈曲部で南北に伸びた後、下流側調査区では現楠根川に重複して北西流していることから、旧楠根川の流路の一部であると推定される。内部堆積土は、上方より第１層灰青色細砂・第２層青灰色シルト混粘質土である。第１層灰青色細砂には、弥生時代中期から近世に至る雑多な遺物（**16～34**）が含まれていることから、第１層は二次堆積土層と考えられる。



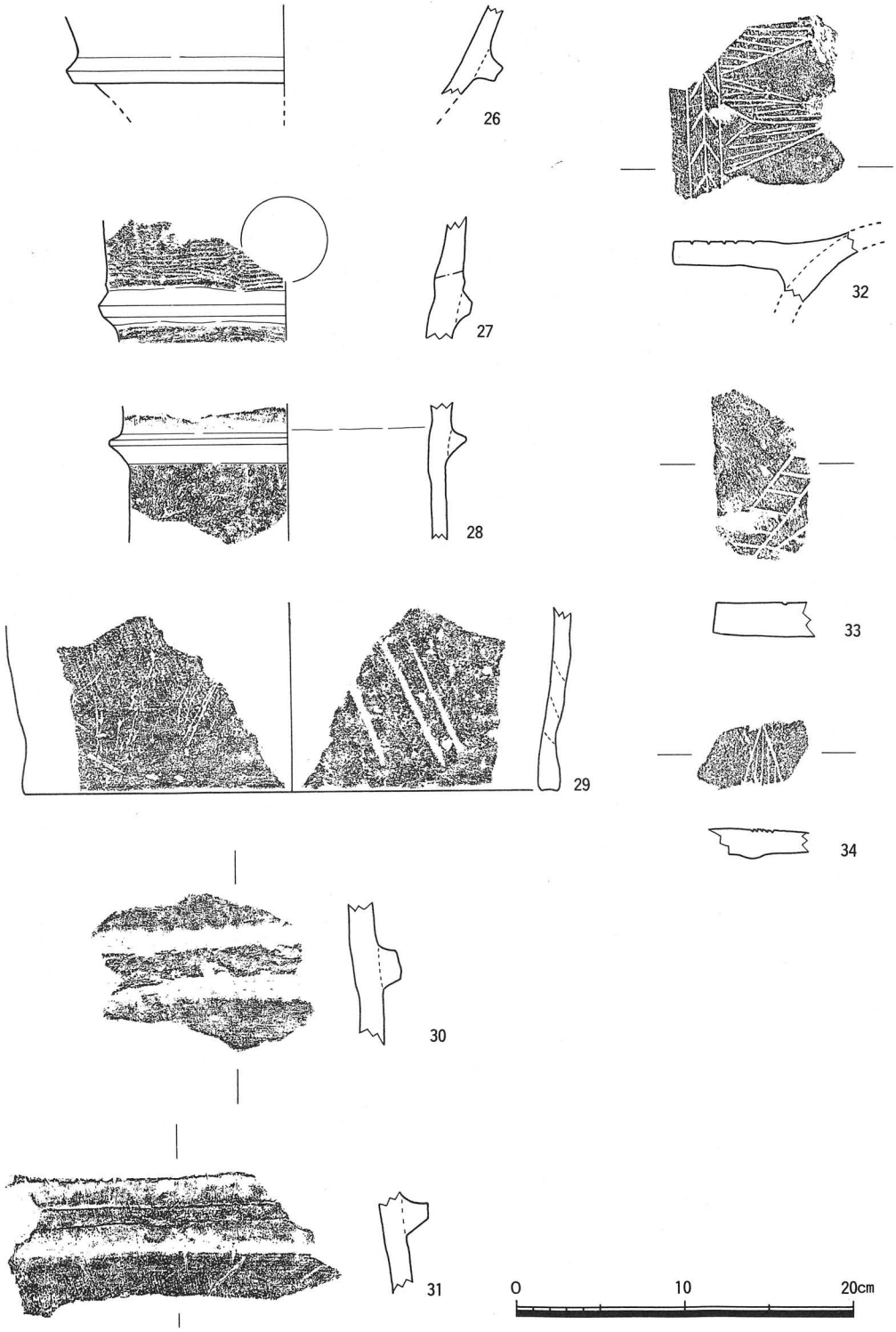
第10図　SD－7平断面図



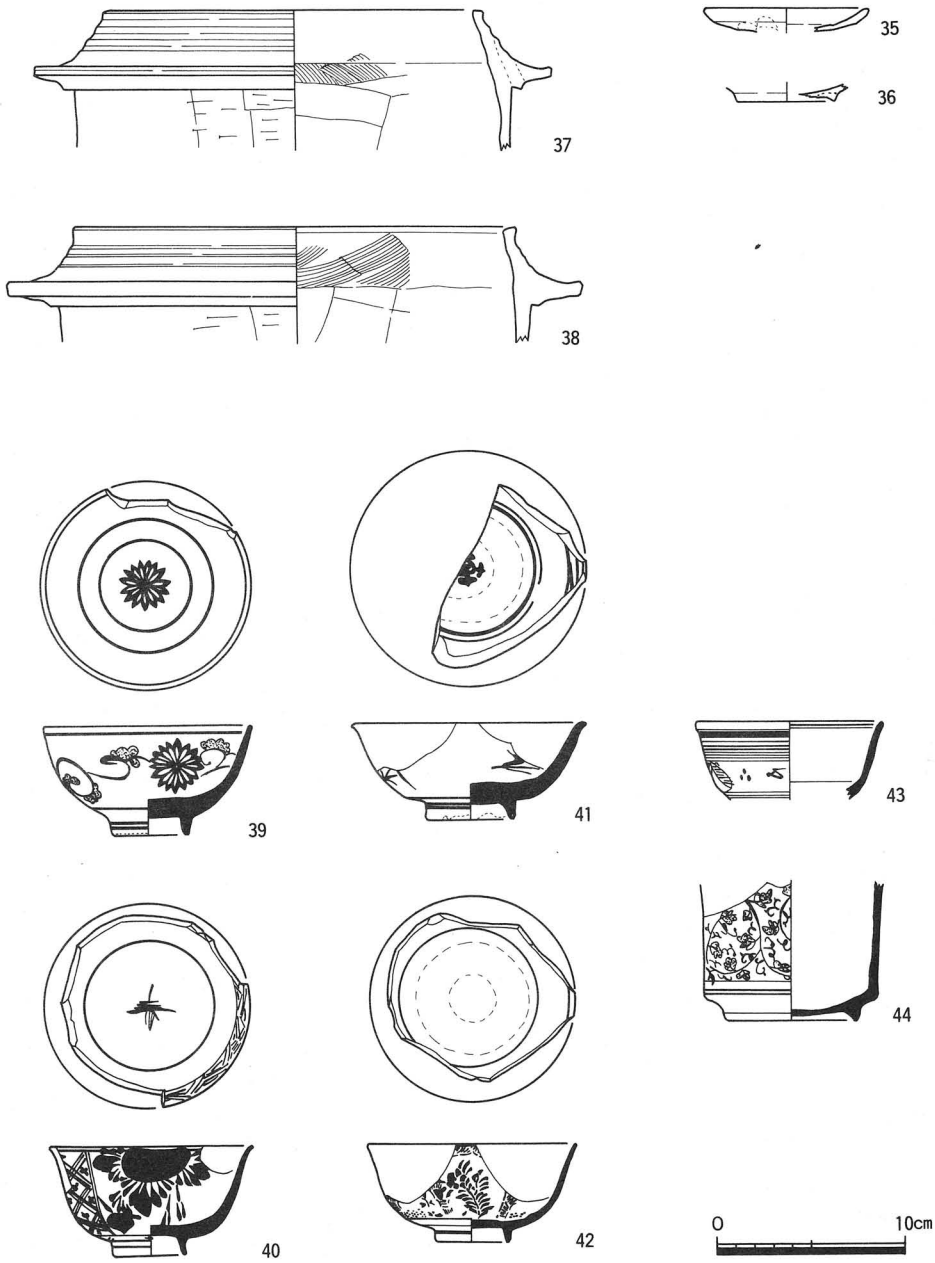
第11図　SD－7出土遺物実測図



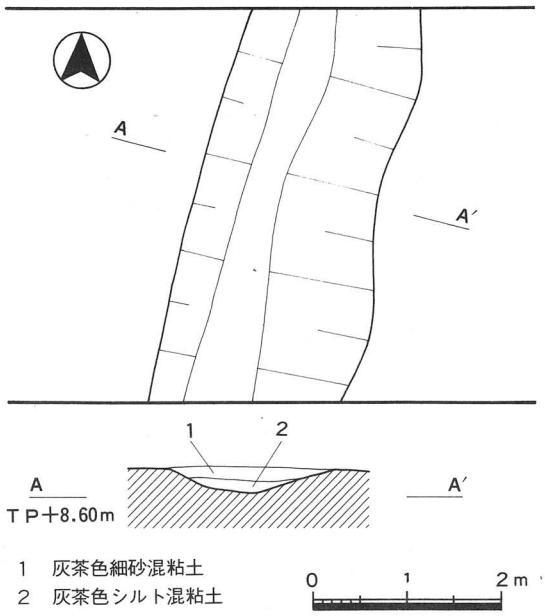
第12図　SD－8出土遺物実測図1



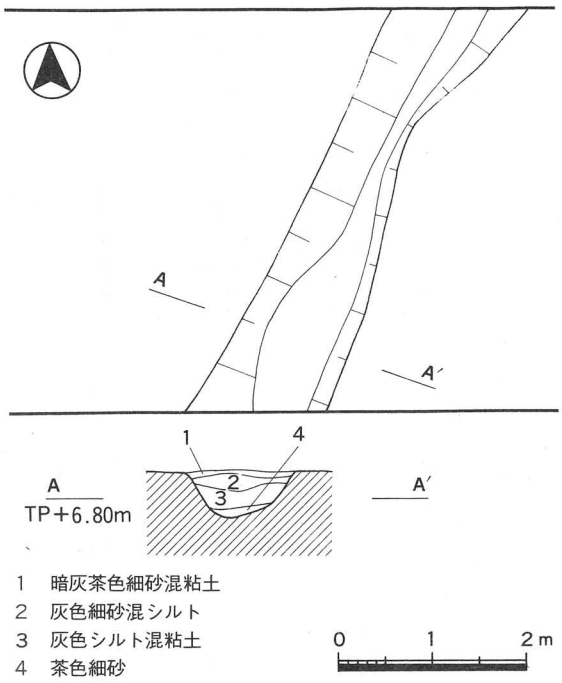
第13図　ＳＤ－８出土遺物実測図２



第14図　ＳＤ－８出土遺物実測図３



第15図　ＳＤ－９平断面図



第16図　ＳＤ－10平断面図

ＳＤ－９

Ｌ区で検出した。南西－北北東に伸びる溝で、幅約1.7m・深さ約0.25mを測る。内部堆積土は、上方より第１層灰茶色細砂混粘土・第２層灰茶色シルト混粘土である。第２層から、土師器の細片が少量出土している。

ＳＤ－10

Ｎ～Ｏ区で検出した。南西－北東へ伸びる溝で、幅約1.2m・深さ約0.45mを測る。内部堆積土は、上方より第１層暗灰茶色細砂混粘土・第２層灰色細砂混シルト・第３層灰色シルト混粘土・第４層茶色細砂である。遺物は出土しなかった。

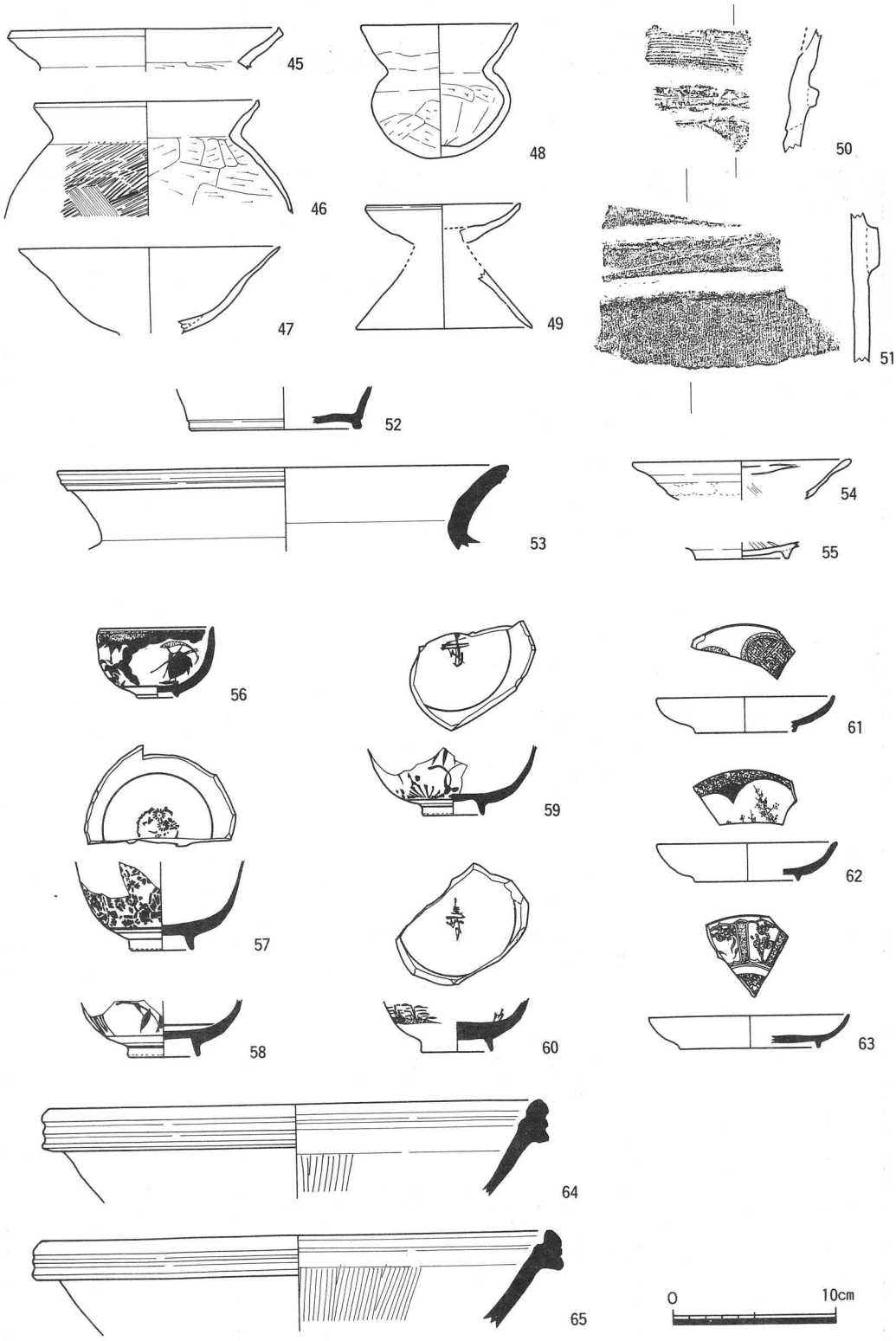
２）出土遺物

出土遺物は、遺構・包含層からコンテナに４箱出土した。遺構からの出土遺物については遺構説明に概略を記述しているので、ここでは包含層からの出土遺物について記載する。

包含層は、第Ⅲ層灰茶色細砂混粘土層・第Ⅳ層茶灰色粗砂混粘土層・第Ⅶ層灰茶青色シルト混粘土層である。

第Ⅶ層からは、庄内甕・小型丸底壺・小型器台・土師器高杯・須恵器杯身・須恵器甕・埴輪（**45～53**）等の古墳時代の遺物が出土している。第Ⅳ層からは瓦器椀（**54・55**）等鎌倉時代の遺物が、第Ⅲ層からは磁器碗・陶器擂鉢（**56～65**）等江戸時代の遺物が出土している。

なお、遺物個々の特徴は、第４章出土遺物観察表に委ねる。



第17図　包含層出土遺物実測図

第4章　出土遺物観察表

SE－1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	瓦器 椀		15.6 ——	外反気味に立ち上がり、端部は丸く終る。 体部内外面はヘラミガキ、口縁部外面ヨコナデ。	黒灰色	密	良好	
2	瓦器 椀		15.3 ——	ゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部はやや外反して丸く終る。 体部外面は指頭圧成形後、横方向のヘラミガキ。内面は横方向のヘラミガキを密に施す。見込みは格子暗文。口縁部外面はヨコナデ。	黒灰色～白灰色	精良	良好	

SE－2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎調	焼成	備考
3	土師器 小皿		7.8 ——	丸みのある底部から外反し、口縁部に至る。口縁端部は内側に丸く肥厚する。 体部内面ナデ、外面は指頭圧成形の後ナデ。口縁部内外面ともにナデ。	乳褐色	精良	良好	
4	土師器 中皿		11.6 ——	やや丸みをもつ底部から外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸味をもって内側に巻き込む。 体部外面指頭圧成形後ナデ。口縁部および体部内面ヨコナデ。	淡灰褐色	精良	良好	
5	土師器 中皿		8.8 ——	丸みのある底部から斜上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。 体部外面ヨコナデ、内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	
6	瓦器 椀		15.3 ——	ゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部はわずかに外反して終る。端部は丸い。 体部外面はヘラケズリの後分割ヘラミガキ。内面は乱方向のヘラミガキ。	黒灰色～乳灰色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
7 七	瓦器 椀		16.0 ——	口縁部はわずかに外反して終る。端部は尖りぎみに丸く終る。 体部内外面ともにヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	
8 七	瓦器 椀		—— —— 高台径 7.5 高台高 0.9	高台は断面U字形を呈し、「ハ」の字形に開く。 見込み乱方向のヘラミガキ。高台および高台内はナデ。	黒色	精良	良好	
9 七	瓦器 椀		15.2 6.0 高台径 8.0 高台高 0.9	半球形の体部で、口縁部は外反気味になる。口縁端部内面に沈線状の浅い凹みが廻る。高台は重厚で断面U字形を呈し「ハ」の字形に開く。 体部外面は4分割のヘラミガキ、内面は密なヘラミガキの後螺旋状ヘラミガキ。	黒灰色 一部灰白色	やや粗	良好	完形
10 七	瓦器 椀		15.0 5.9 高台径 7.5 高台高 1.3	形態は9に似る。 体部外面は4分割のヘラミガキ。内面および見込みは放射状のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。高台部ナデ。高台裏ヘラケズリ。	黒灰色	やや粗	良好	完形

SD－7

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼土	備考
12	須恵器 杯身		—— —— 受部径17.5	受部は上外方に伸び、断面三角形を呈する。 底部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。受部回転ナデ。	淡灰色	精良	良好	
13	土師器 小皿		9.0 ——	底部から斜上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は丸い。 体部外面は指頭圧成形後ヨコナデ。体部内面および口縁部内外面はヨコナデ。	淡茶橙色	精良	良好	
15	黒色土器 椀		—— ——	外反する口縁部。 体部内外面ヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。	外面 乳灰色 内面 黒褐色	精良	良	

SD－8

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
16	弥生式土器 壺	底径	—— —— 6.4	突出する上げ底の底部。 底部外側面ヘラケズリ。体部外面下半ナデ。底部内面ハケ後ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	外面 暗灰褐色 内面 茶褐色	やや粗	良	
17	弥生式土器 壺	底径	—— —— 6.2	平たく開く体部からわずかに突出する上げ底状の底部。 体部外面および底部外面ケズリの後ナデ。底部内面ナデ。	外面 乳褐色～黒色 内面 乳灰色	良	良好	
18 八	土師器 小型鉢		10.5 7.0	尖りぎみの底部からゆるやかにカーブを描いて立ち上がった後、角度を斜上方に変えて口縁部に至る。口縁端部は丸い。 体部外面ケズリの後ヘラミガキ、内面ナデ。口縁部内外面ともにヨコナデ。	淡赤褐色～黄褐色	密	良好	
19	土師器 高杯		—— ——	柱状部は内弯気みに内傾する。 柱状部外面ヘラナデ、内面シボリ目。杯部内外面ナデ。	淡紅色～乳褐色	やや粗 5㎜程度の花崗岩含む。石英粒多い。	良	
20	土師器 甕		17.4 ——	「く」の字形に屈曲した後、口縁部は斜上方へ外反気みに伸びる。端部は上方へつまみ上げられ、尖りぎみに終る。 口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	良 角閃石を多量に含む。	良好	
21	土師器 甕		19.0 ——	「く」の字形に屈曲した後、口縁部は斜上方に伸びる。端部は上方へつまみ上げられ、丸く終る。 口縁外面ヨコナデ、内面ハケ。体部内面ヘラケズリ。	暗褐色	良好	良好	
22	土師器 甕		19.7 ——	外反気味に伸びる口縁部。端部は丸みのある面をもつ。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	灰褐色	粗 石英・長石を多量に含む。	良好	
23	土師器 甕		24.0 ——	「く」の字形に屈曲した後、口縁部は斜上方へ伸びる。端部はつまみ上げぎみに尖り、外側面に沈線状の凹みが一周する。 口縁部外面タテハケ後ヨコナデ、内面ヨコハケ後ナデ。体部内面ヘラケズリ。	灰褐色	良好	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼土	備考
24	須恵器 壺	口径 5.5 器高 ——	口縁部は体部上半から鋭く外反して、外下方に肥厚して終る。端部は丸い。 口縁部内外面回転ナデ。体部内面ナデ。	淡灰色	密	良	
25 八	土師器 甕	口径 14.8 器高 ——	内弯気みに立ち上がる体部に、器肉を増し「く」の字形に屈曲する口縁部が付く。端部はほぼ平坦で斜下方に面を持つ。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリと一部ハケ。内面は横方向のケズリ後、ナデ。	赤褐色	やや粗	良	
35	土師器 小皿	口径 8.5 器高 ——	底部から斜上方へ伸び口縁部に至る。端部は丸く終る。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指頭圧成形後ナデ。	灰褐色	粗 石英・長石を多量に含む。	良	
36	瓦器 椀	口径 —— 器高 —— 高台径 5.2	断面逆三角形を呈する高台が付く。 高台内外面ヨコナデ。見込みヘラミガキ。	灰黒色	密	良	
37	土師器 羽釜	口径 19.7 器高 —— 鍔径 27.0	内傾する口頸部は3段に成形されている。鍔は幅狭で、水平に付けられている。 口頸部内外面および鍔裏面ヨコナデ。体部内面ハケ後横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	黒褐色	粗	良	
38	土師器 羽釜	口径 23.0 器高 —— 鍔径 30.0	内傾する口頸部は3段に成形されている。端部は内傾する面を有する。鍔は水平に付く。 口頸部外面および鍔裏面はヨコナデ、口頸部内面ハケ。体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	黄褐色～淡赤褐色	やや粗	良好	
39 九	磁器 碗	口径 10.9 器高 5.7 高台径 4.0 高台高 0.9	平坦で厚い底部から丸みを持って立ち上がり、直立する口縁部に至る。 体部外面菊・唐草文。見込みに菊文。圏線は口縁部外面1条・口縁部内面1条・見込み2条・体部外面下半1条・高台2条。	釉調 灰白色 呉須 淡青色発色 不良	緻密 黒色粒を含む。	堅緻	
40 九	磁器 碗	口径 10.6 器高 5.8 高台径 3.7 高台高 0.9	平坦な底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部付近でわずかに端反になる。 体部外面は四方襷文を三方に配し、その間に草花文を描く。口縁部内面菱垣文。見込みに「寿」。圏線は見込み1条・高台脇1条・高台1条。	釉調 白色 呉須 濃青色発色 良好	緻密	堅緻	

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　土	焼土	備　考
41	磁器 碗		12.0 5.1 高台径 4.7 高台高 1.0	平坦で厚い底部から強く腰を張った後斜上方に立ち上がり、口縁部付近で端反になる。 体部外面草文。見込み五弁花。圏線は体部下半1条・高台2条・見込み2条。	釉調 灰白色 呉須 淡青色発色不良	緻密	堅緻	見込みにドーナツ形の釉のかきとり
42	磁器 碗		—— 5.2 高台径 3.9 高台高 0.7	平坦で薄い底部から強く腰を張った後斜上方に伸びる。 体部外面草花文。圏線は体部外面下半2条・高台1条・体部内面上半1条・見込み1条。	釉調 白青色 呉須 青色発色良好	緻密	堅緻	型紙手 見込みにドーナツ形の釉のかきとり
43	磁器 碗		9.7 ——	張の少ない腰から斜上方へ伸びる。 体部外面重圏文と蟬文？。圏線は口縁部内面2条・見込み1条。	釉調 白青色 呉須 淡青色	緻密	堅緻	
44 九	磁器 猪口		—— —— 高台径 6.6 高台高 0.7	平坦な底部から斜上方に開いた後、直線的に伸びる。 体部外面草文。圏線は体部外面下半2条。高台1条。	釉調 白青色 呉須 青色発色不良	緻密 黒色粒を含む。	堅緻	

包含層

遺物番号 図版番号	器　種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色　調	胎　調	焼成	備　考
45	土師器 甕		16.8 ——	「く」の字形に屈曲し外反する口縁部。端部はつまみ上げられる。 口縁部内外面ヨコナデ、体部内面はヘラケズリ。	暗褐色	やや粗 1mm以下の長石、角閃石多量に含む。	良好	
46 八	土師器 甕		13.5 ——	丸みをもつ体部から「く」の字形に外反し、端部をつまみ上げて終る。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面単位の細いタタキ、内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	良好	良好	
47	土師器 高杯		15.8 ——	内弯した後、斜上方に伸び口縁部に至る。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。	淡橙色	密 長石・石英の小粒を含む。	良	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼土	備考
48 八	土師器 小型壺		9.5 8.0	球形の体部から屈曲した後、斜上方へ伸びる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ヘラケズリ。内面上半ケズリ、下半ナデ。	淡褐色	やや粗	良	
49	土師器 小型器台		9.4 ——	円錐形の脚部に皿状の杯部が付く。杯部口縁端部に沈線状の凹みが一周する。 全体に風化が著しく調整は不明。	淡黄褐色	精良	良	
52	須恵器 杯		—— —— 底径 10.4	水平な底部から斜上方へ立ち上がる。底部端に「ハ」の字形に開く高台が付く。 杯部内外面回転ナデ。高台および外底面ナデ。	灰色～暗灰色	精良	良好	
53	須恵器 甕		27.3 ——	「く」の字形に外反する口縁部。端部は尖りぎみに終る。口縁部先端外面に凹線を持つ低い凸帯が廻る。 口縁部内外面回転ナデ。	青灰色	密	良好	
54	瓦器 椀		13.0 ——	口縁部は外反し、端部は丸く終る。 口縁部ヨコナデ。体部外面は指頭圧成形後ナデ。内面は粗いヘラミガキ。	白灰色	精良	良	
55	瓦器 椀		—— —— 高台径 5.6 高台高 0.4	断面逆台形を呈する高台をほぼ垂直に貼り付ける。 見込みに平行線暗文。高台部および外底部はナデ。	淡灰色	精良	良好	
56 九	磁器 碗		7.3 4.3 高台径 2.5 高台高 0.3	丸く張る腰から直立気味に立ち上がり口縁部に至る。 体部外面坊主と笹文。圏線は体部下半1条・口縁部外面1条・高台1条・口縁部内面1条・体部内面1条。	釉調 青白色 呉須 青色	緻密 黒色粒を含む。	堅緻	
57 九	磁器 碗		—— —— 高台径 4.0 高台高 0.7	やや張の少ない腰から斜上方に伸びる。 体部外面・見込み草花文。圏線は体部外面下半2条・高台脇1条・見込み1条。	釉調 淡灰緑色 呉須 濃青色発色良好	緻密 黒色粒を含む。	堅緻	型紙手

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
58	磁器 碗	—— —— 高台径 4.3 高台高 7.6	腰の張りの大きい体部下位以下が遺存。 体部外面木文。圏線は体部外面下半2条・高台脇1条・見込み1条。	釉調 白厚色 呉須 淡青色発色 良	緻密	堅緻	
59	磁器 碗	—— —— 高台径 3.7 高台高 0.7	58に似る。 体部外面草文。見込み「寿」。圏線は体部下半1条・高台脇2条・見込み1条。	釉調 白青色 呉須 濃青色発色 良好	緻密	堅緻	
60	磁器 碗	—— —— 高台径 4.4 高台高 0.7	平坦で厚い底部から丸みを持って立ち上がる。 体部外面松原と帆掛け船。見込み「寿」文。圏線は体部内面下半に1条。	釉調 白色 呉須 淡青色発色 不良	緻密	堅緻	
61	磁器 皿	10.8 2.2 高台径 6.2 高台高 0.4	丸みを持って立ち上がる体部。 体部内面丸文。口縁部に口紅。	釉調 白色 呉須 青色発色良 好	緻密	堅緻	
62	磁器 小皿	10.8 2.3 高台径 6.3 高台高 0.4	平坦な底部から腰で丸く張った後、斜上方へ立ち上がる。 体部内面草木文。	釉調 白色 呉須 濃青色発色 良好	緻密 黒色粒を含む。	堅緻	
63	磁器 小皿	12.2 2.0 高台径 8.7 高台高 0.3	62に似る。 体部内面窓間に花鳥文。口縁部に口紅。	釉調 白色 呉須 青色発色良 好	緻密	堅緻	型紙手
64	陶器 擂鉢	29.8 ——	口縁部は上方に拡張し直立する。口縁側面に2条の擬凹線、内面口縁部に沈線状の凹線が廻る。 内面に8条を一単位とする櫛目を施す。口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリの後ナデ。	赤褐色	良好	良好	備前焼
65	陶器 擂鉢	30.9 ——	口縁部は上方に拡張し内傾する。口縁側面に2条の擬凹線が廻る。口縁部内面に沈線状の凹線が廻る。 内面に10条を一単位とする櫛目を施す。口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリの後ナデ。	赤褐色	良好	良好	備前焼

第5章　ま　と　め

調査の結果、弥生時代後期から近世に至る遺構が検出され、当遺跡の北部の様相を確認することができた。

弥生時代後期から古墳時代前期の検出遺構は、溝遺構6条のみで、この時代当調査地付近は居住区域の中心から離れていたことが窺える。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構は、井戸遺構2基・小穴遺構1個・溝遺構1条を検出しており、この時期この地が集落の居住地域の一部に組み入れられていたものと推定される。とくに、井戸ＳＥ－2から出土した2点の瓦器椀（9・10）は、いわゆる「和泉型瓦器椀」の中でも最古に位置付けられる資料と言える。当調査地のほか、中・南河内で「和泉型瓦器椀」成立期に比定される瓦器椀が出土した例は、西琳寺遺跡井戸[註1]・長原遺跡第27トレンチＳＫ022[註2]・巨摩廃寺遺跡井戸18[註3]・佐堂遺跡ＳＸ401・ＳＫ408[註4]・木の本遺跡第6調査区ＳＥ－3[註5]が挙げられる。今回出土した瓦器椀は、中・南河内における最古の瓦器椀を考えるうえで、上記出土例とあわせて貴重な資料であるといえる。

一方、溝ＳＤ－8から出土した埴輪片は二次堆積の遺物であるが、中にはローリングをほとんど受けていない資料が含まれており、比較的近隣に埴輪を包含する土層の存在が推定される。さらに、当調査地の東に隣接する地点で実施された調査[註6]では、埴輪円筒棺1基が確認されており、当調査地付近に古墳時代中期の墓域が存在する可能性が強い。

註

註1　羽曳野市教育委員会　『古市遺跡群発掘調査報告書』　1979

註2　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター　『長原』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1978

註3　(財)大阪文化財センター　『巨摩・若江北（その2）』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984

註4　(財)大阪文化財センター　『佐堂（その1）』　近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1985

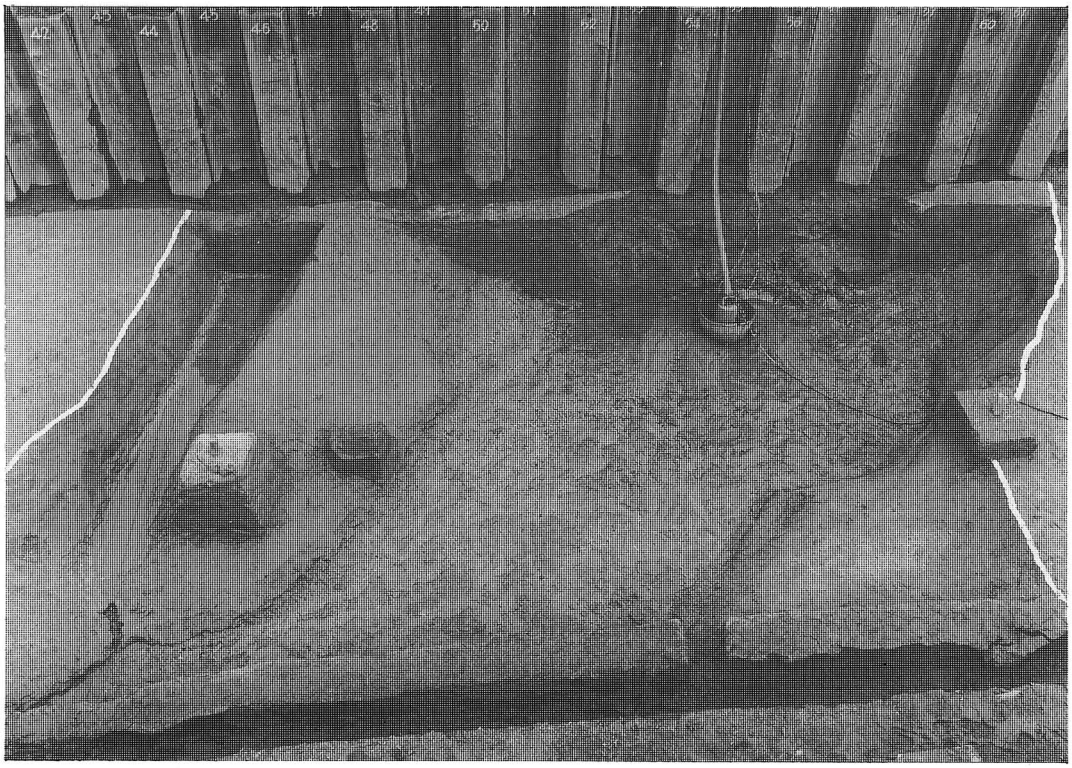
註5　(財)八尾市文化財調査研究会　『木の本遺跡』　八尾空港整備事業に伴う発掘調査：(財)八尾市文化財調査研究会報告4　1985

註6　(財)八尾市文化財調査研究会　「小阪合遺跡（第4次調査）」　『昭和59年度事業概要報告』：(財)八尾市文化財調査研究会報告7　1985

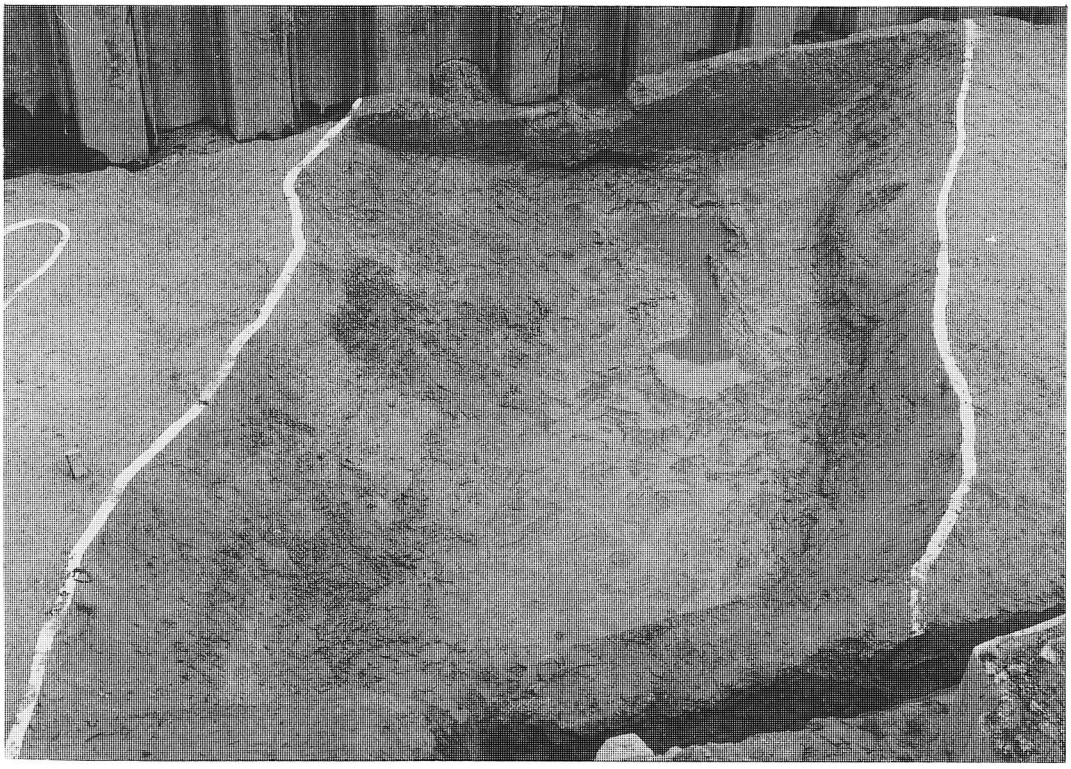
図　　版

下流調査区第 3 調査面全景（北から）

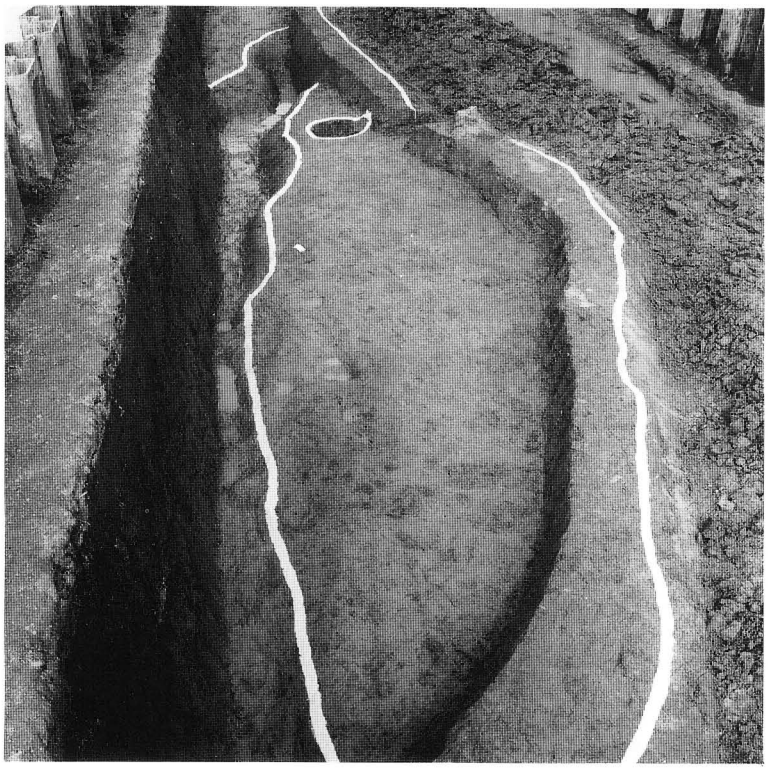
上流調査区第１調査面全景（西から）



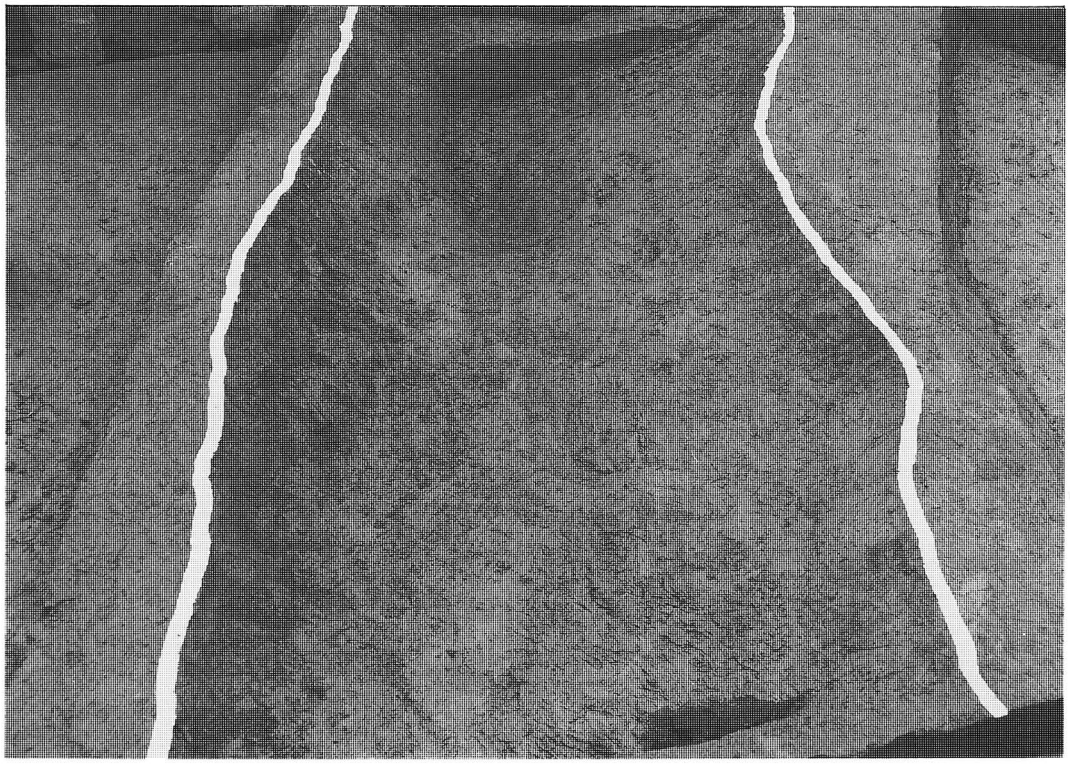
ＳＤ－２・ＳＤ－３（南から）



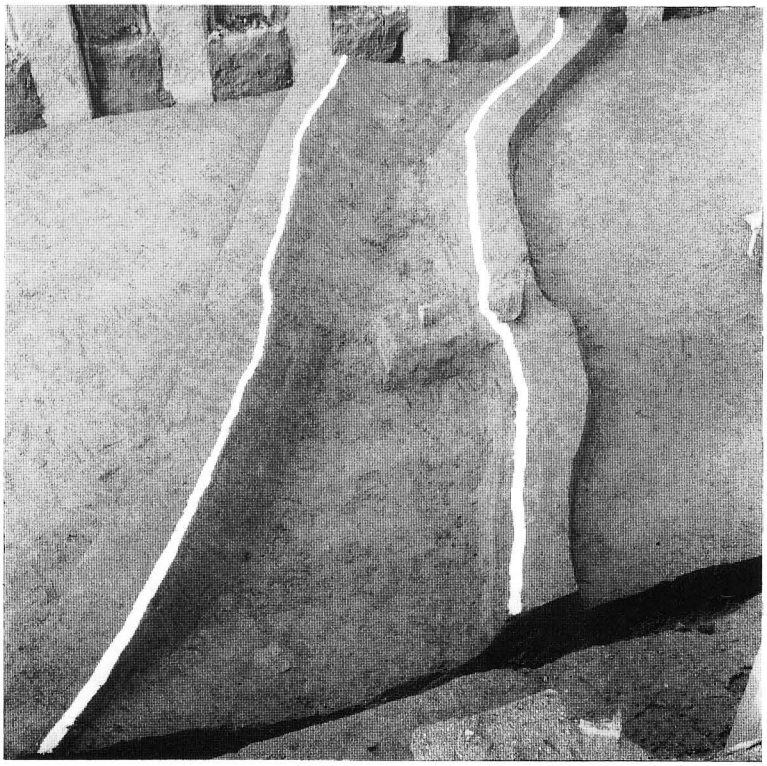
ＳＤ－６（南から）



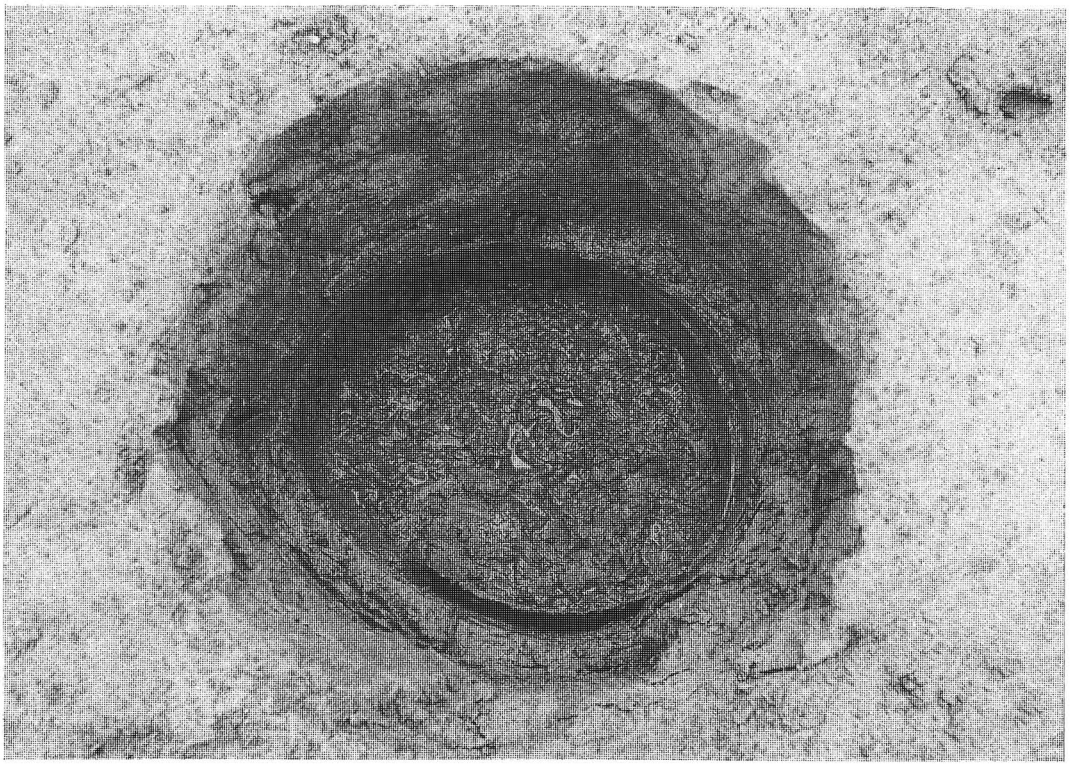
SD－7・SD－8・SE－1（南から）



SD－9（南から）



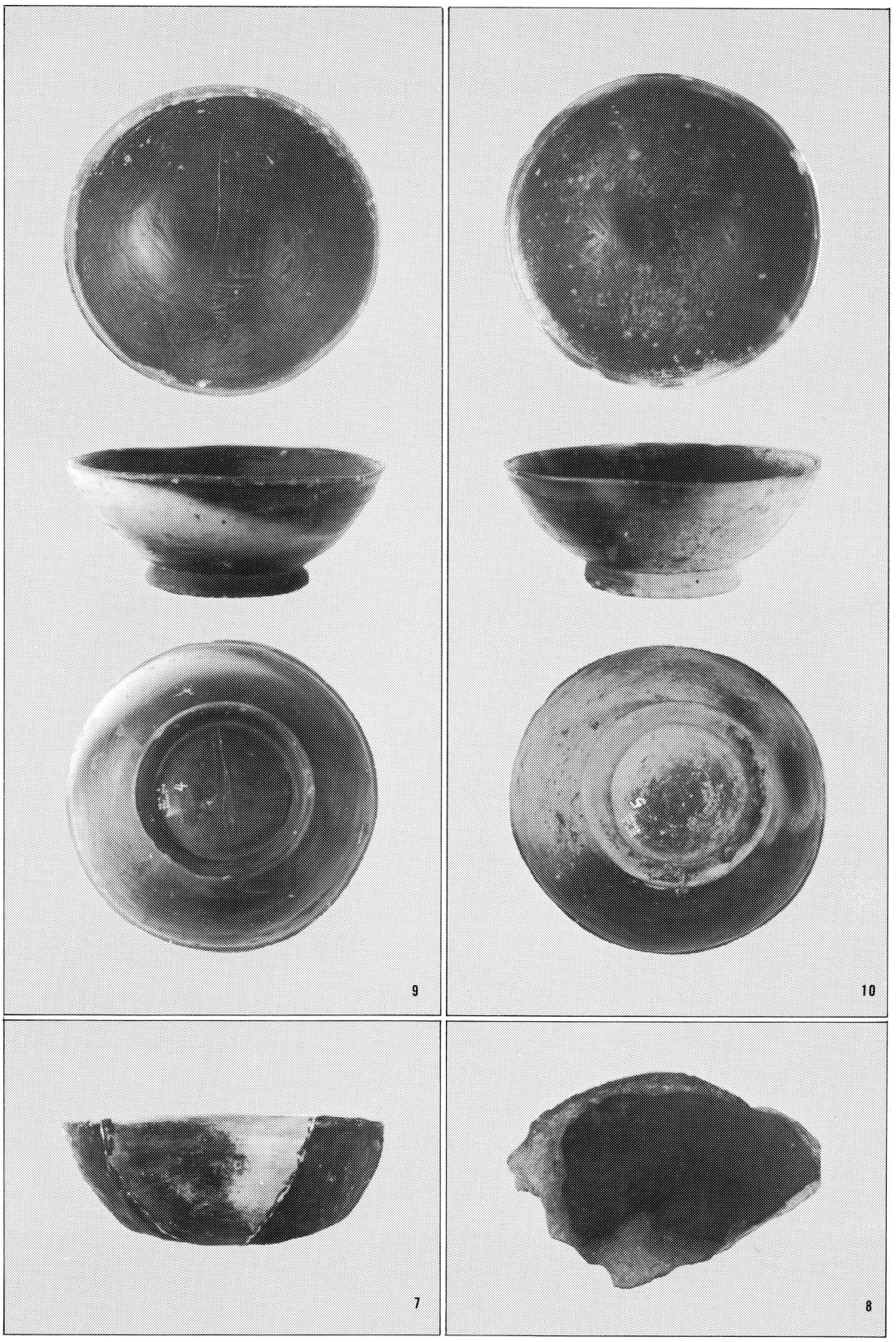
ＳＤ－10（南から）



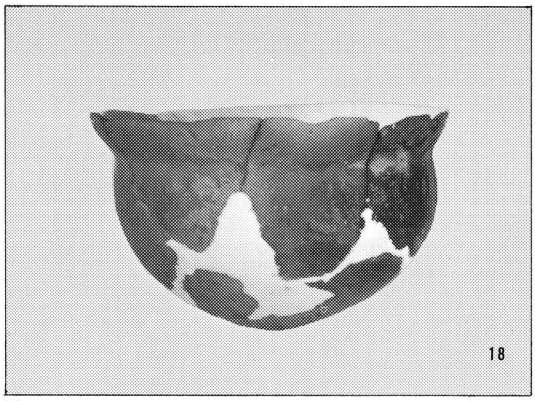
ＳＥ－１（南から）

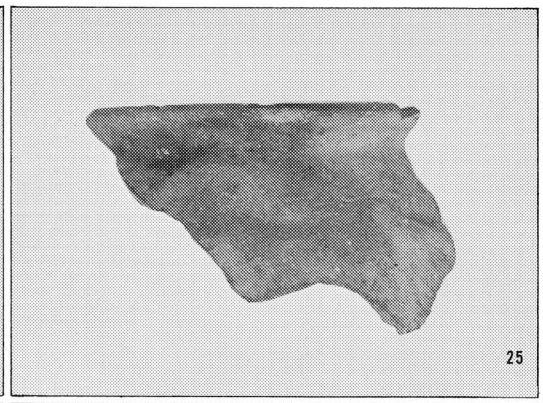
ＳＥ－２ 遺物出土状況（北から）

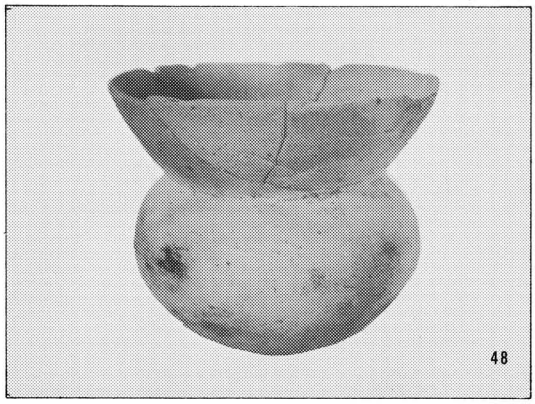
ＳＥ－２ 完掘（北から）

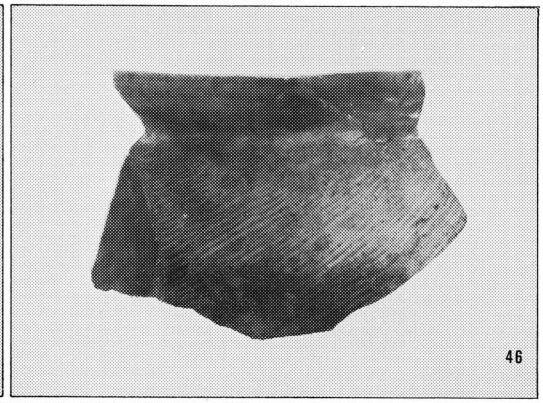


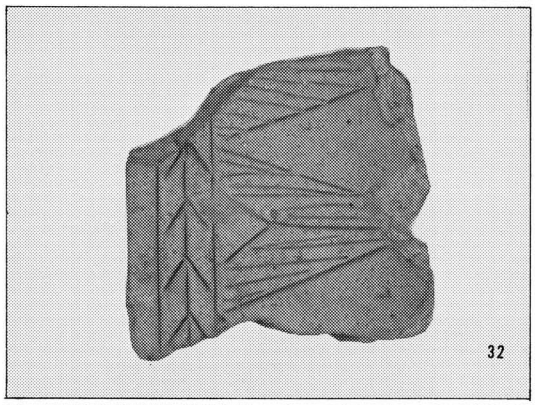
ＳＥ－２ 出土遺物

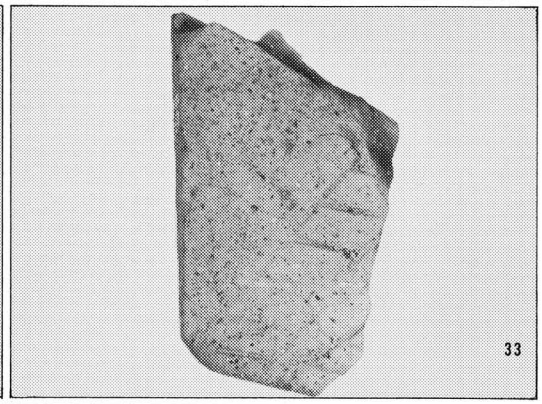


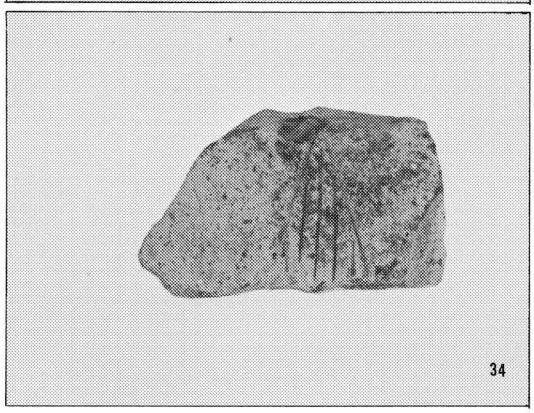


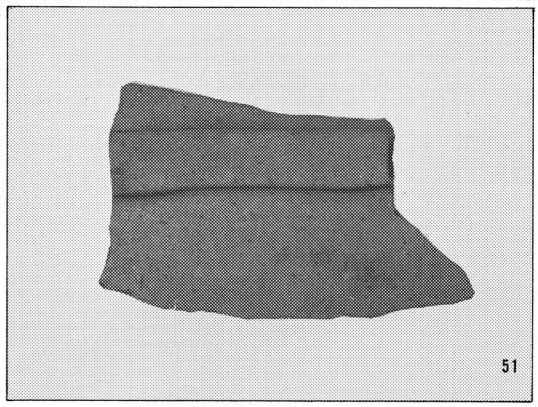




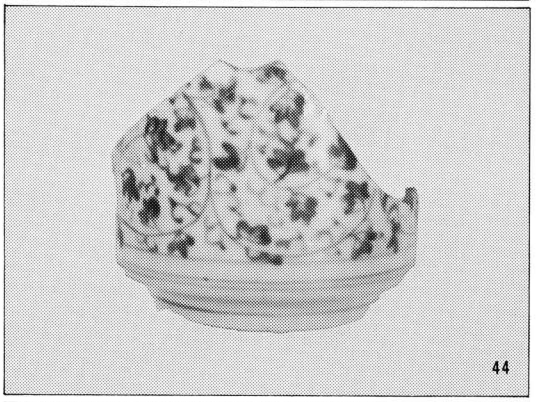








ＳＤ－８（18・25・・32～34）・包含層（46・48・51）出土遺物



ＳＤ－８（39・40・44）・包含層（56・57）出土遺物

(財)八尾市文化財調査研究会報告 8

小阪合遺跡発掘調査概要報告
— 流域下水道等整備に伴う発掘調査 —

発行　昭和61年 3 月

編集　財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 八尾市清水町1丁目2番1号
電話番号　0729－94－4700

印刷　株式会社　八 戸 の 里 タ イ プ

表紙　レザック66　260kg
本文　上　質　110kg
図版　アート　110kg

032